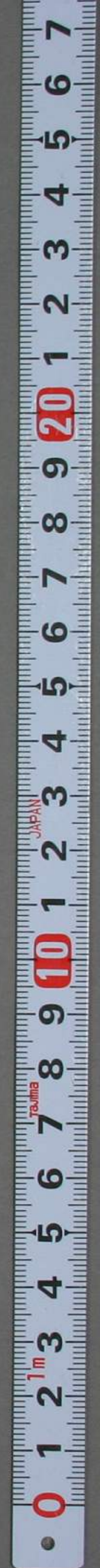




西  
銀  
第  
日  
法  
  
初  
編  
  
徳  
川  
書  
院

ル 4  
4745

















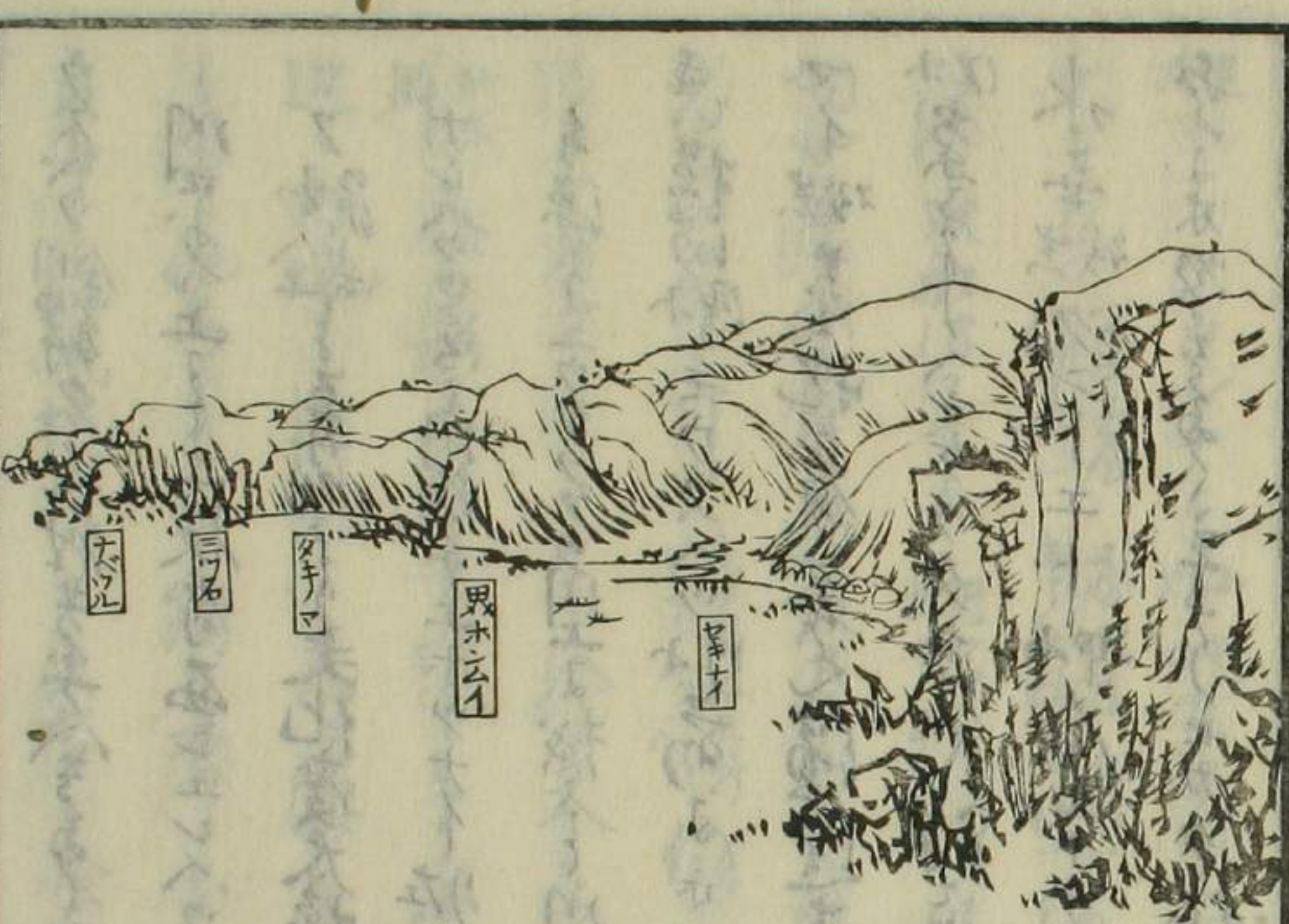






古墳黒石の図  
 熊岳  
 石熊  
 古墳  
 黒石  
 古墳  
 黒石  
 古墳  
 黒石

川が依るくしレハ岬の沙溪  
 下りて平定ブヨチレる下戸坂  
 へレナイけり  
 カエトエマヘツ小川を極愛を石カ  
 イトリ洞と云是より人おし大岩  
 下屋ヲタニコロヘツ小川を中カイ  
 トリマと云是より沙カイトリマ小岬  
 を越て橋石大岩懸る岬口ヤシ  
 ケヲヤモエ岬口を宮本ヲタ小岬本  
 多き故よりヲタと云のより岬口



演をくヲタと云るまを祀てウタと  
 云あ中ウタ上ウタの岬口  
 中演上流と云カマヲタ地戸岬  
 小エカウレナイ小ホシヲタウレナイタ  
 ニコロリヲレマルナイ小ヲレマコマナ  
 イ岬口内岬口と云人おし左  
 奇木ヲタエエナヲ岬口と云又前よ  
 ヨリキ  
 高岬と云有トフカルレナイ小岬口  
 蒼々木目母岬と云岬口ヤソツ  
 ケ岬口をゴしと云岬口ありあり



ウスベツ  
余智名義は若人  
若く有改号  
く多門と云ふ  
クワンレキ  
申に

川口<sup>カミ</sup>上<sup>ウヘ</sup>二股有<sup>ニクダアリ</sup>西<sup>ニシ</sup>ユ<sup>ユ</sup>ヘツ<sup>ヘツ</sup>と云<sup>トイフ</sup>上<sup>ウヘ</sup>バ<sup>バ</sup>ンヨ子<sup>ンヨコ</sup>フ<sup>フ</sup>わ<sup>ワ</sup>人<sup>ヒト</sup>ガ<sup>ガ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ヘンヨ子<sup>ンヨコ</sup>  
の便と云

フれ人上  
の民云々  
と云有云より  
文化度大橋ナベ岳の下を越え  
て海より東をメ

ナレヘツと云ふ間物チエホツナイ  
リ左チマラセナイ  
リ右ヘシケチヤラセ  
リ右左ナ  
ナナナ

ユウラツの川上は城といふ處ありきまも省ユウラツ大ノ井ノ中ニ

モウスヘツホ  
ホシ  
クワレキ申口

マイ  
イ  
エ  
ヒ  
ヨ  
ヲ

由不<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>遷<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>影<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>テレケウ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>イ<sup>レ</sup>ウ<sup>レ</sup>ケウタ

人  
ニ  
カ  
テ  
タ  
ヲ  
ヤ  
花  
上  
の  
深  
く  
ユ  
ノ  
リ  
川  
ホ  
ホ  
名  
ニ  
ヨ  
リ  
ナ  
イ  
と  
云

村  
 磯  
 クニト  
 エト  
 岬  
 今  
 エナラ  
 端  
 とき  
 人  
 昔  
 漁  
 娘  
 の  
 時  
 爰  
 海  
 神  
 を

舟は木幣を多く主るヒカタ  
 酒人衆之般間人衆  
 主芸人砂儀酒

テレケウシナイ川此東岸より  
増田村境海軍署より辛卯  
月因田平より辛卯年陸路凡  
少半余

クドウ  
備前一  
藩ヲ據ルヤ  
衆ノ社格高シ  
濱取来東向  
右ユウタ岬  
在リエナ  
ヲ岬

[illegible]

朔的軍以四時  
 龍殺大元馬  
 治等化子土人  
 文政改平利  
 子人時  
 五五也

之を印分と云ふ  
字の改九折  
依て土切利も印分と云ふ在るがウウヅ

[illegible]

和名 人形多  
又言其  
小島  
又言其  
色  
又言其

[illegible]

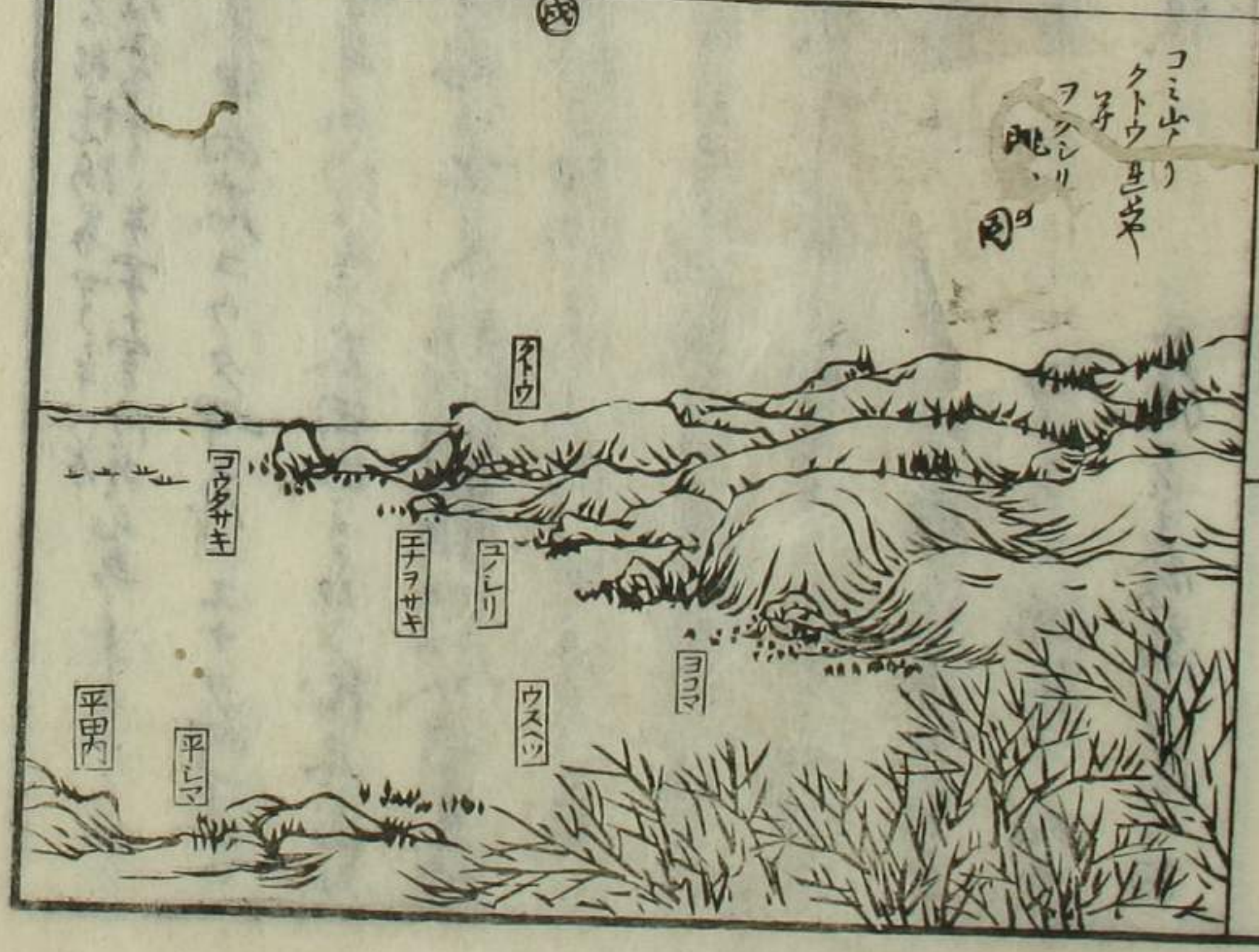
四  
地  
通  
氣  
來  
海  
力  
大  
風  
聲  
如  
海  
氣  
也

不、他より来りし書に、金土危甚、此處二山より、  
鮑勃を始り

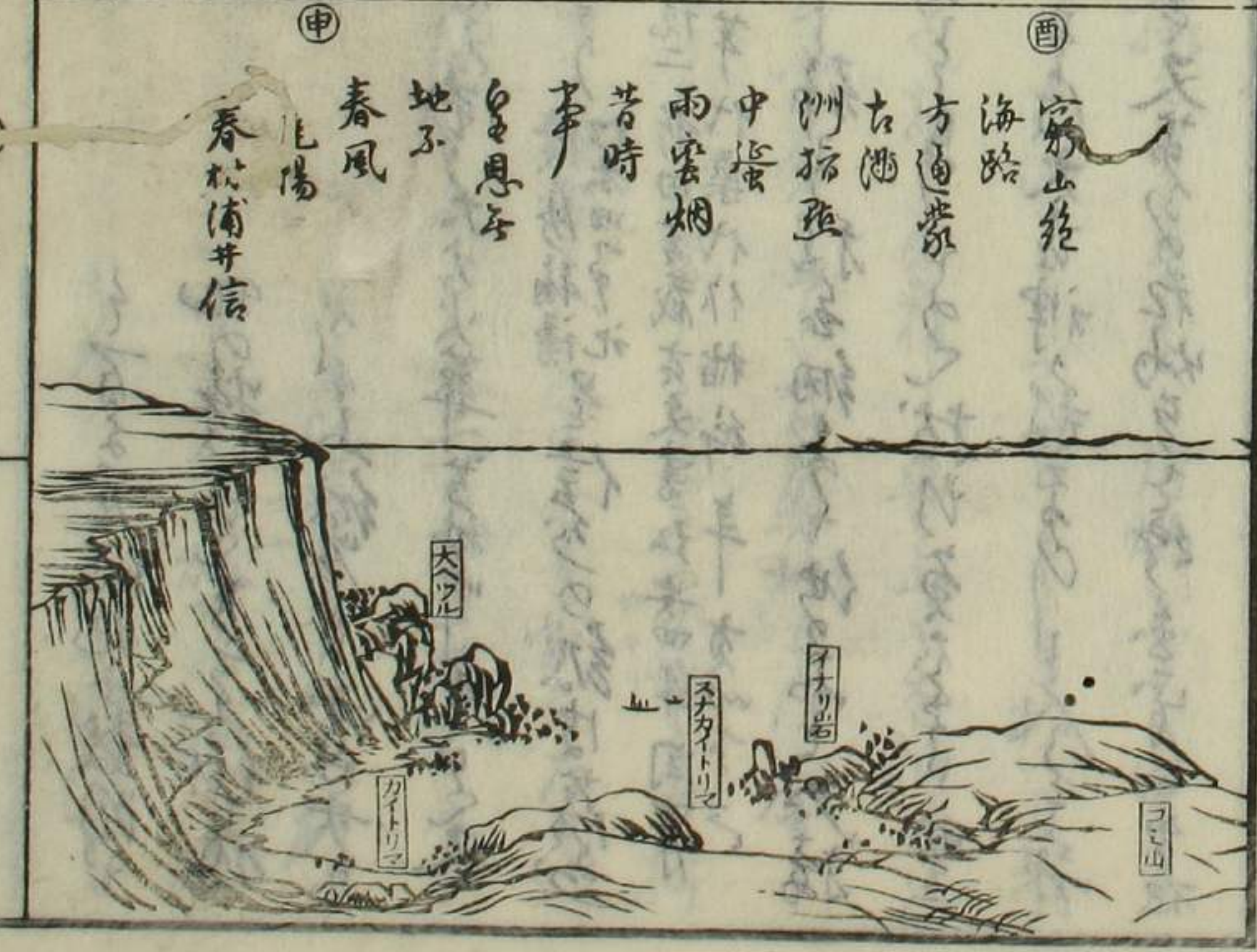
五斗子海菜地六月五日市上餘錫錐成其布海苔其餘雜貨



手匠能く及至其の利網を月  
 数<sup>二</sup>百<sup>二</sup>三<sup>八</sup>九<sup>〇</sup>を長或又七八人を一  
 抱くも其の地盤を分せしむるも其の  
 の三ッ操繩の長十尋位あり頭は  
 浮きし所より其の長と縄を長く  
 下は二二の月の名を附是をナフチ  
 鎮石  
 とも網を底舟の横出海船より其  
 縄の群ありふし其の長と縄を  
 真ありふし投入し其の左より小き魚  
 を<sup>三</sup>拾<sup>四</sup>目を抜く海去り目魚あり



目利を伐く網を水より  
 舟中へ振ひ置きしより其の丸小を  
 を補理ししを收納しし是を引込  
 縄とて内地を其の縦横一匹は  
 此の二廻り長と奥より四月五月  
 より六月七月八月九月十月  
 縄を束より南より北へ縄を束より  
 束より北へ縄を束より白蛇四匹あり其の  
 縄を束より其の縦横一匹は他國の耕  
 する土地の一大を其の他國の耕

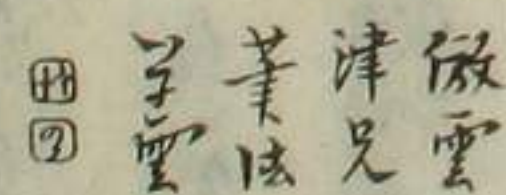








卷之五



八





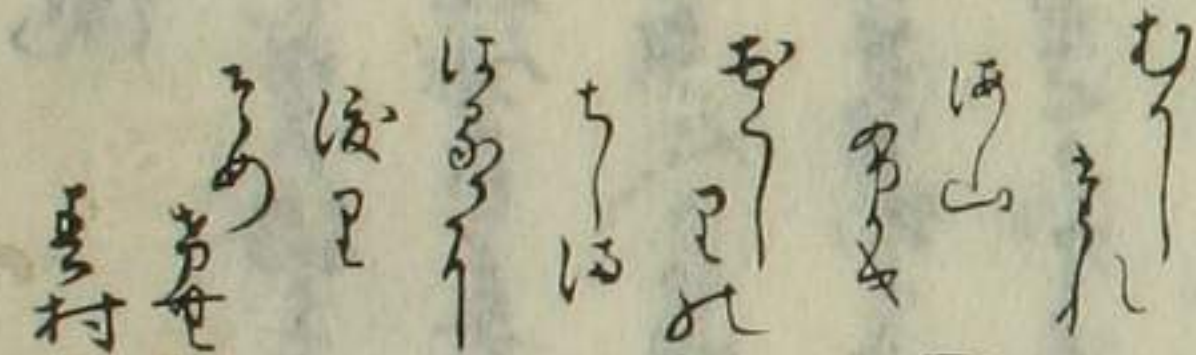








Two photographs of the same insect specimen, likely a larva, showing its segmented body and legs. The specimen is light brown with darker spots and is shown from two different angles.



西華縣志初



元有々コモマワシの男ハクエクマ省マウサン北フレフタ泊留キヤシ  
 地平にホ芳の地跡と安徳と年辛未秋八月二十日公信  
 綱馬王工藤祐長朝臣自奥州南部四郎部来于小寺遂至上國朝  
 勢時友経とと人の白解ハクカ又定ふと寺を補と云ふ者今  
 わる沢村大守守の舊地くと云依て今の山号と奥鳥と云ふ  
 沖に風こそゆきとくさるり繪まうつたはれと云ふ人の語

太田頌

地は何の軒きや今も太田と書号を名に寄る事ありけり  
又土人絶てり故近頃は請負人より盛産をうけなむと  
枕高場と申せし是上りの地なりおユクリヤウシとも  
臥木を濟り仙木を濟り

[illegible]



江戶秋景

卷一



恰似神劍之鬼劍千尋  
鐵鎖倚崖寒誰之縣度  
鉤梯險矣皆以窓展畫  
看  
北越水嶋題  
江戶秋景書

江戶秋景

七



其の事は後にもせし二ベシナイも切上はあつた切下りも切上り  
 小吏に追ひられ弟殿の出来り審み又その事と許し給はれども怪  
 然といふ切上りも再びはなれり鳴呼の歌の心におし神を留  
 大勢に言ふおほくも中々愛を道に如く物を持ちてふと風愛ひ  
 けふよ以て時ほふ物と家より細り順風を乞ふと雲騎若く  
 きと又奥地へおれんとせし二ふと持ちて一とを愛しゆり一とをけり  
 小と海より過るものも依り家よりけり物を持ちて  
 崖よりヒカタトマリ 廣く後方の船を風を待てしラカミ岳の華衣  
 とて雲より巖崖然欲死墜左右翠屏横直中一峰屹々恰如夢の事  
 呼天抱岳數年併立問うに守者不知名前川又十有詩曰言絶指問



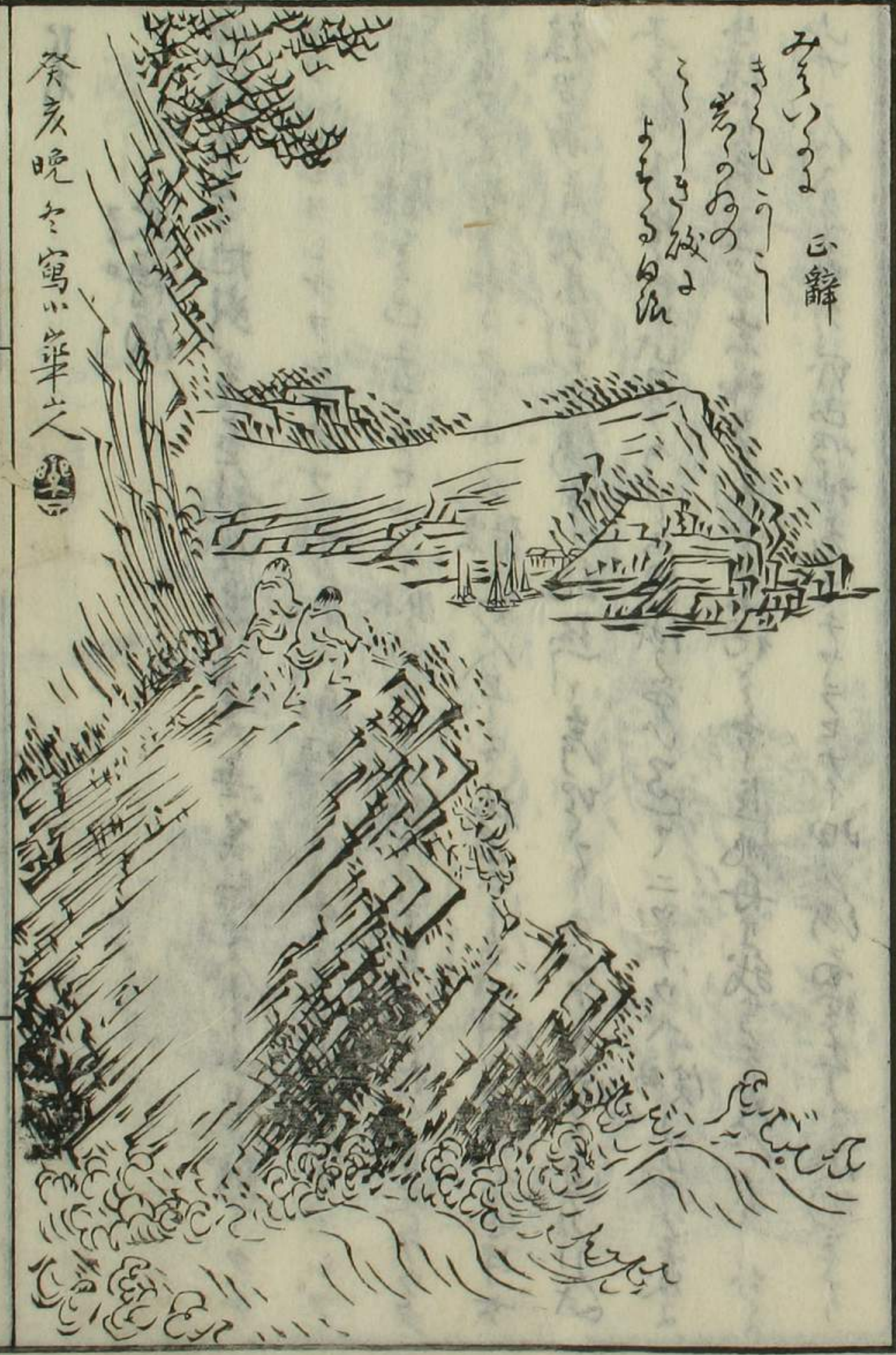
無名怪異年折来有毒疑を實をうと云ふと其の傍に解をたれと  
 百金を樹枝を角動を冒髪草鞋濺血弄く空壁の下に二條法鎖を  
 と懸けしもの十金を酒に汁を大サ又修徳の如くを愛撫を伴加中へ米鏡  
 佛貝と多く依り白波輕重産目眩須臾の新作を夫天の神を心地  
 偏にや仙の思をある主人の口を愛し義理をあると近は又河村歌を  
 藤王権現の像を安んずる御前歌あり

太田山をきくつあり一をちう頼まざる也君りある  
 崖下ニトワラタハあつと早の村に太田と旅りトワと解ヲタは河  
 昔の愛と道とをきく一は人か又是と二ツチウへ山道に力一由る物能  
 蛇咬昆布能の難魚也又愛し極るカキ七金を力と思ふ



此度又よりより二ツの事を越へたる石の山越へる所を切開き  
 峯嶺一は派を越へて上を越へてレフンクルトマリ石を満ち  
 湧き出る水よりとヲチヤウシ下崖テレケウシ同エラミテ岬を  
 水に附きりて越へるやホー子ヲコバツセ國を越へるの事あるホニア  
 キ定より派を越へる所の水はゆるゆると下を流る余はを越へ  
 ぐる下屏風を越へては洪濤激怒一を越へるの事あるホニア  
 大なる事との事ある越へるの事あるホニア  
 上を越へて下へるに百歩半濡身がぬる泥よまみれなり  
 水子居る所を越へる事あるカムイムシベハ  
 岬過て堺目一よりナチアハ  
 柱を越へる所の事ある岬内を越へる事ある武末もかくと思ふ

みづいづま 正辭  
 まづいづま  
 まづいづま  
 まづいづま



西海物語

癸亥晩々 寫小筆之



りわ

大樽願

標極と云の地新産を絶嶮信尖無空船地人余と山と城てクチ  
 ヤラ岬シヨレケランハノブ岬わ人船隠しの定と云上と越てニシブ  
 コリアイ産をるのチャラセナイ岬の上と山城とを是をわ人云九ウタ  
 と云又岩壁をクツホク壁和人是を標極と云岬と云也山平女  
 餘男角大木倒大岩海中乱張る岸垣なりホニアキ岬自通なり  
 不を船より仰る如けりやうと思儀ふて二ツチウベ岬と云又  
 出極有前二ツの岩破を并ての小祠と云近眺舟に我を人へりか  
 山中何れもなり山岬地底てチャラセナイ岬の海面空より水烟より



風あふ磯をれい  
 いふらぬくぬく  
 波の—も—は  
 は

竹道人  
 印





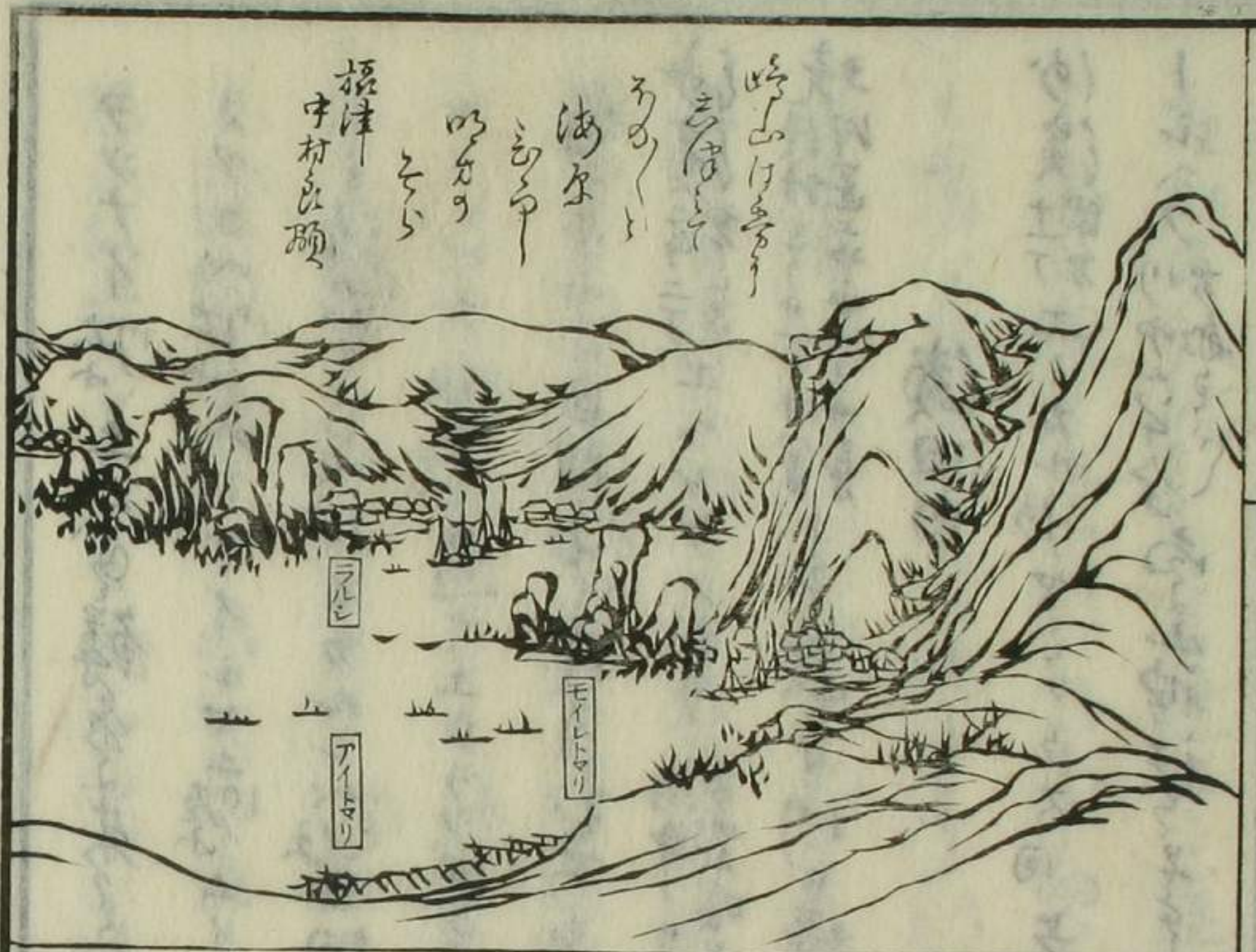




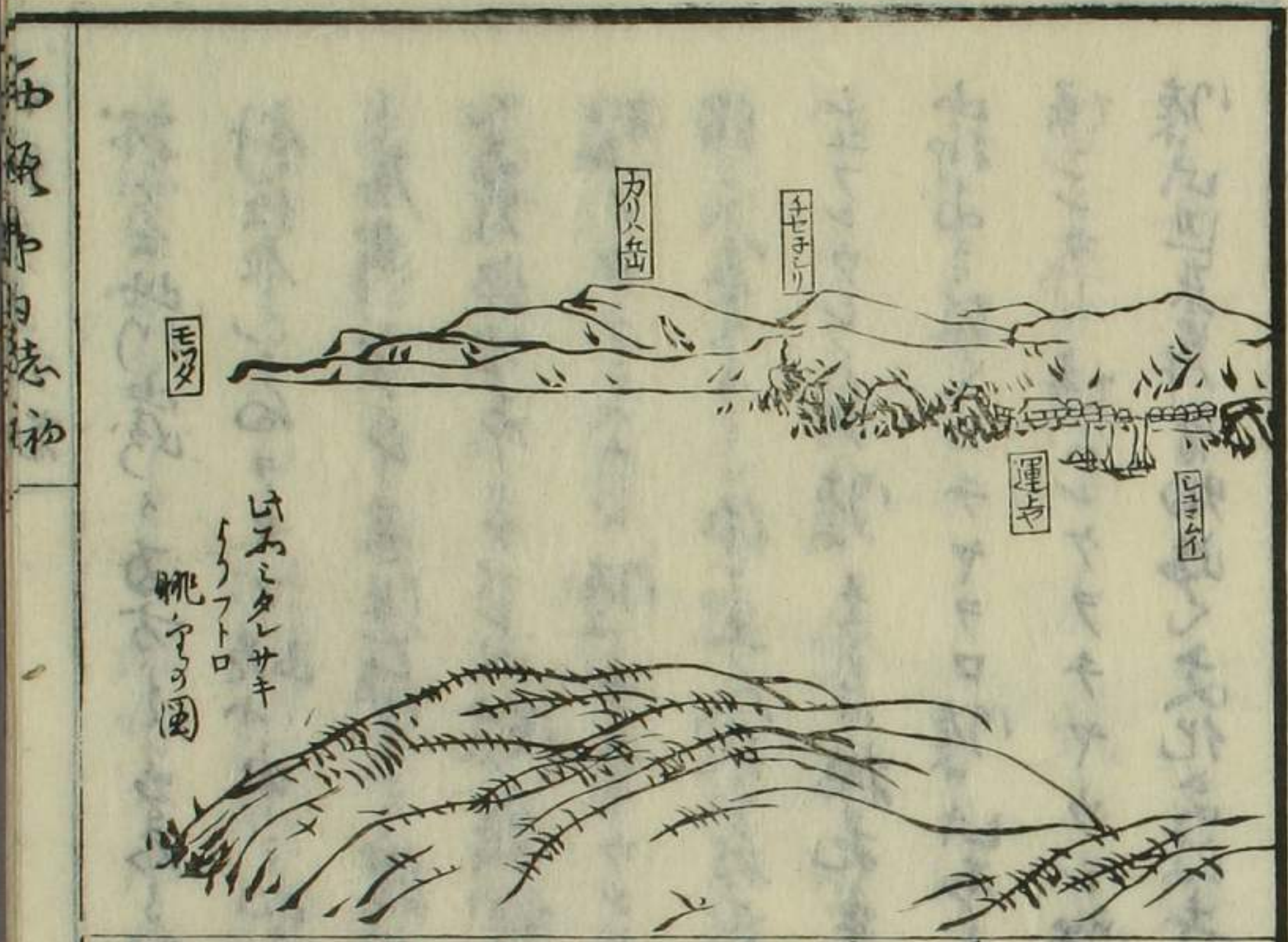








新中も住やうきありまゝと文を  
 草間と云烟あられも草庵の  
 可憐さそいふとドバと云あゝと涙  
 坊々傍れれと云う文は四  
 提  
 一秋味始ふ初中の魚こつ魚  
 一川那うと産細切お祈りする人  
 一川那うと産細切お祈りする人  
 一川那うと産細切お祈りする人  
 一川那うと産細切お祈りする人



右通堅志得るもの  
 月日 セタナイ 運正  
 右外陸海中に棲る言葉又云  
 有訪と云ふも又初と云ふ中  
 新と云ふ又大漁の時なほ其の  
 版を振舞ふて答へた云ふ  
 方此處より除く物と云ふと云  
 其方方て最なるもの  
 名義面地としての説きツウレヘツウ  
 ツウは山崎の義と云ふ又云



































カハ橋の延びるや何れ地を構えりカハを渡れり内地を花を  
 賞を橋を久後朝日近江の橋物のやカハ橋花を日々に折  
 人の  
 六帖  
 有るを考ふは懐つたりや余を愛ふ哉  
 カハ橋の延びるや何れ地を構えりカハを渡れり内地を花を  
 賞を橋を久後朝日近江の橋物のやカハ橋花を日々に折  
 人の  
 六帖  
 有るを考ふは懐つたりや余を愛ふ哉

西坡集日誌初編

十巫山鎖三峯九峯依約煙雨中百丈成龍  
 上急灘奔湍倒瀉潏潏蓬俄風起天  
 昏黑白日失光海失色雲了帳如舞加馬挂濤  
 血陷深谷且魏嶺死非死生死生一呼吸  
 間不可測一峯乍見一峰危須臾露飛子散  
 水雲蒼蒼瞥過不覺數十里多少風煙淨冰  
 茫回首徒前危屹屹空九嶺潏潏倚倚夕  
 陽船過九美峰  
 九美峯在振興西涯九峯驛列  
 有梅溪中野曰九美峯  
 文公癸亥嘉禾月原溪古錄舊制  
 雲







